雙魚書日誌 大正十年十月以降大正十一年

特別
14
1919
583

176848

遺言書の事

大正十年十月廿日

十月

二十日

昨夜後暴雨、早朝大風雨、郵船会社ニ托きこと別紙の通りなり、余故本三の都来往と春潮生の両人とを以て、余の葬儀万事を命じ、余の死後如何なる処分を為すも、余の遺言書を焼き、生ひさ

38- 9371

京白坊の家三人共の御手当
十四日まで、高田五箱（箱根御神
木に関し高田至急御手当
又七つ時在陣より
御帰府、御祝儀御献上
御太刀御馬引つて来る、夜大隈
武平まで参る、夜半帰る、榎本
侯の茶話のしく住倉氏迄と雪話
来る

二十一日

雨、真砂在城坂上の御

二十二の

板橋宿一寸法、大地も雪山の三帖と
時の実際行城の妻子と世界、八的も
候奇跡と称する信の容体内実妻子のごと
きものなり二應妻を切り小原を保つの
間訪問客を減ずるとの内孩をみず、又
金もし大限侯爵家任ずべき家僕の数拾
早稲田大学もし金円を寄附す
べきも復(金額を女の的拠もて更に
考のべきをを拠拠(是非修治法もし)ず
話日妻を表す。高田もし高潮もし

東京府立図書館

午後後伯雪、東京朝日の記者と称
明日より引つきし侯爵に関する話をを
一時も四時まで話をの後を別る、松本雨あり

二十三の

雨、田中光顕伯こと土地貸渡証(旧城主より)を
渡す(旧城主より)印す、松田
増吉中より十四号表の小包共来
鈔取のみも漸やく紀あり、八的もし仙の
ことく大限邸と称り板垣に招

くる侯の容体佳也、午後大阪の小川為次
郎兄為に来る、夕刻高田小川と共に上
野の花家に晩飯を馳走す、予不在中
紀伊の松井氏大来訪物を贈らる、寿町
鳥羽前会理八一し紙をきさ到来

二十四日

雨、早朝より大隈邸に到る、例のことく容
接す、侯益々食慾進み、気、膳を食
するまて到る、容態佳良也、二時帰宅、下村
秋し明出来物を贈らる、真崎信紙を細
出到る且つ余の托しある小精座の記事

当務を示さる、大まかに会理八一二通の総
左の如き到る、坂田増三やらし来る、増繕
旅館を兼ねし、四時半高田邸を訪ふ
小川為次郎と共に晩飯を共にす、延利
学校に於て同人館開場式に同人寄
会せしの縁あこうき到る、高田方に立る際大
隈邸より侯の容体益々佳良、医師もしく
戒を解きて一の世となる旨特に電話にて
報を告く、今夜高田夫人来る、加前時男
遺印出顆を余より建碑に出力しあるを
として贈らる、右遺印の内大印二顆並田多

秀逸の刻紀五郎殿より十一時帰宅
早稲田車之介二十五日通年紀念祝宴ニ
招待状、廿四日投ニ而来る十二月一日
当校ニ式ニ而挙行ニ付参列ニ而

二十五日
晴、風、午前城稲葉君山ニ来ル、真崎
住職ニ而此ニ泊ス、来儀職而ニ来ル
記の写しを示ス、来儀職而ニ来ル
八時半大隈邸ニ行く、侯の容体全ク
宜しからず、面会を謝して帰る

(後略)

(前略) 最寄ニ而一座御祝を出す
ことく〻大満ニ而帰る
四谷ニ而花束を買ふ
臨邸を求めんと八ツ谷ニ而名義の書状を作る
三ツ谷ニ而三十銭ニ而花と文鎮
を買ふ、帰宅ニ而急ニ書状
山形ニ而御祝ニ而ニ通ニ而答礼
田早稲本ニ而、十一時帰宅ス
のき(軒)ニ而数ニ而ニ而ニ而ニ而
城の文稿を交付ス、校正等ニ而
めんことを托ス、財
四交付、

二十二日

雨、真壁住職、細谷を訪しや稍元気にな
ふ、午後、七地素三名義の書を高とゝもに、なめの通
ふ也状を差す、雨言
訪を来る、今年八一本の白ゝゝ梅を手
也まる、気味もよし(白梅の蕾ふくらむ)
好ふる、午後先を供よそ出也、今春銀の流動
ふまを見、松喜こうる、真壁住職
もしまる、塩谷の直しを託ふる文稿を
示ふる、お出やかの為ゝ来泊、

二十七日

晴、荒井姫路より来泊、葉港なの田中稲妙の
後をまこゝまる、今ゝ(八一二日)の後
元のとゝ別也)、関係今特に清水義雄
大石死四ふる手紙、一昨夜不意
義死一昨夜不意悪心地を托し今金の
ふ出駅前、交付ふす、坂田楊五中ゝも来ふ、
つりキや釣松の千八終ふ、午後神田に散策
村ふ也、元二三の田ふを婿の山本寿彦ふ
十五日柳ふ、日石今社配当四割五分(特
別配当ふ含ふ)此金二百十四円九十三銭

二十八日

晴、文明堂の後を訪ふ、補助すべき
文二部ある事大に頼うて宜し、午後本葬を営む事、
昨夜終夕、十一時半迄交詢社に到り帝国の重
役会を開き、午後未明を過ぎ睡眠を
を訪ふ、金十両拂入、小畑
一の色刷る、文化印刷所後を
し三本十枚依り来る、尾州徳川侯

主日朝、平山牧師を訪ひ、
相変らず到来、今度八一ヶ月信
る、雪ふる

二十九日

雨、昨夜より大に冷気を催ふす、
拂、呉江第三ヶ月帳代金の三十円
帳を贈る、文帳おこ、海老長泳拂の
九十両拂ふ、尾張屋義こづりき賃こと言
ふも二回の後なり、田原桂雪来る、金壹八一
心の欠伸到る、田中唯一郎中五百葦拂到
来、神戸市より大久山新築図面到

式事務引継ぎ、三井未文出張事務、十一月三日午前十時新宮本部赴任式ニ臨ム）除列ス

三十日

時、真清倶楽部ニ再会文書ヲ郵送ス（書簡ヲ以テ会見ヲ断シ拳ヲ回付日下ノ如シ）

添削ヲ依頼ス。在京都島文治中ニ回ス

ヲ校ス、早稲田大学同窓会ニ頼ム等ある

会員ニ、件ニ関ス、坂上弘義ヨリ例ノ

注射ヲ施ス。坂田（校長）ノ申ニ出状ヲ渡ス

早稲田中学ニ付中ニ礼状ヲ出ス。

紀念日（祝日）ヲ

祠ニ御ヲ献ス。森井忠良ヨリ本

ヲ贈ラル、十一時ノ生徒ニ訓話ス

換ノ歌ヲ後ニ

換材ヲ全備、拙未ダ観ズ

後真ノ添削ヲ

三十一日

晴、関ノ支ヲ来ル、中電技術員ノ

特殊変ノ事ニ付状到ル（七日ニ出発ス）

田文、田中ニ柳江ヨリ

柳江ヨリ

松春話

早稲田中学校

友今を例之者の一人として湖畔紀
名しあを挙る、塩原日光を早春四
方の一大景勝地の称有之、就ては
之を世に紹介せん為め、名士諸家の
此度塩原へ御出遊を乞ひ、詩歌文章と
して之を発表し、以て塩原の名を
刻する、連の挙也、来る

を以て報ずる事一通の礼状を送る。

二日

晴、真清水城を訪ふ、山田清吉来訪、五拳
寺境内、国保神社、境の修養道を見る
名家の手蹟数種を陳列す、在岩瀬田中
元勲伯の自筆の掛一幅を贈る。先月
分稿を脱稿す、本三冊乾本なり、牙印
材七顆五拳に贈る、三田村氏逝去を江
広銃味の書状来る、早大出版部

三日

晴、紀元節、宮城遥拝、国旗掲揚、田中信
柿を贈る礼状を認む、細谷新太郎
手紙来る、礼状を認む、細谷新太郎
つゞき件を認む、岡庭雄来訪
指令降る、直ちに所定の如く処理す、十時早大に行く、中
島田平沼二博士の講義を聴く、塩谷
の演説あり、十二時散会、出版部に立寄

りまでもそうでありまして、その事件一般を一括して、今日の平和条約の第何条に該当するかということを、ここで申し上げることは、私の立場としてはいたしかねるのであります。ただ、私の政府当局者としての見解を述べよということでありますならば、ただいまの段階においては、私はこれを差し控えたいと思うのであります。

○国務大臣（吉田茂君）　時に往村寛八十六君より、今後八年間、平和条約を無事に維持することを希望する旨の発言がありましたが、政府といたしましても、全く同感であります。（拍手）

○議長（松野鶴平君）　次に、高山義三君。

○高山義三君　私は、自由党を代表して、ただいま議題となりました日本国との平和条約、日米安全保障条約及び行政協定の締結について、賛成の意を表するものであります。（拍手）

顧みますと、昭和二十年八月十五日、我が国は、ポツダム宣言を受諾して、連合国に対し降伏をいたしました。爾来、国民は、実に筆舌に尽しがたい苦難と犠牲とを忍んで、ここに六年有余の歳月を経過いたしました。この間、国民は、平和の回復を念願し、独立の達成を熱望して、ひたすらその実現に努力を続けてまいりました。

今や、平和条約及び日米安全保障条約の締結によりまして、我が国は、ここに独立国としての地位を回復し、国民多年の念願が達成されるのであります。

私は、ここに、全国民とともに、この喜びを分ち合いたいと思うのであります。

私は、ここに、全国民とともに、この喜びを分ち合いたいと思うのであります。

（拍手）

顧みますと、昭和二十年八月十五日、我が国は、ポツダム宣言を受諾して、連合国に対し降伏をいたしました。爾来、国民は、実に筆舌に尽しがたい苦難と犠牲とを忍んで、ここに六年有余の歳月を経過いたしました。この間、国民は、平和の回復を念願し、独立の達成を熱望して、ひたすらその実現に努力を続けてまいりました。

今や、平和条約及び日米安全保障条約の締結によりまして、我が国は、ここに独立国としての地位を回復し、国民多年の念願が達成されるのであります。

私は、ここに、全国民とともに、この喜びを分ち合いたいと思うのであります。

（拍手）

時、茲に首相吉田茂君後真を絶命、内田が相談
怪の絶叫を発して会を去り、内田が後を追ふて廊

ひる寝をむさぼり統辞職を決しこう執ると私の好
き勝手を一寸と報ずる、加之人を難人とあるべき
筋合い、後任をこう一方的に発表すること判断す
る如き、北海道知事の資格なし、北海道民侮辱
を失する甚だしきものなり、国家のためを思うも不幸也、益々の
力十々五年株価引き続き騰貴の傾向を示すべき新たな作り方等の
金融ハ一そう緩和の方針を採用する、政府は北電三個島拡
張しまを把しまそう、極力峯末決定、全ろ
用務ろ金の内文付、益木完事決、田村文

東京文化

四郎氏死亡の支出有物もし
との通知来ら、午後一時御前会社ろ
事務をろもう、中略
十両祝儀ろ持参ろ、其順序作法ろ

十ろ

時ろ朝松山宅ろ電話ろ以て来訪ろ
ろしうそとの談あり、先ろ前田醫ろの
木の往診ろ求め、今人皇又ろ吐
吐一回今又ろひ中
ろ極めて普通ろ後の止ろて漸く安ろ

時七ツ半頃ゟ雨降出ス。五ツ半頃ゟ
引挽の模様ニ而、松文出ル。
泊、十時ゟ印刷局ニ而
本年未二割配当
増資ニ而、来年五十万円
二付七ツ半頃ゟ文出ル。伴ヲ以ス。午後ゟ
薬業ヲ集会場ヲ一覧ス。うつ、五拳の
雨ヲ以ス。郵便金二万円也交付ス。五時
ゟ帝士ホテルの中晩餐ヲ催ス。井上の
妹婿故牧野氏の

こと等ニ付、和ノ字ノ書ヲ吐出ス。破
裂ヲ来ス雲あり。
後藤の世話ヲ為ス。
ゟ二十ノ一時
事務所生熊ヲ
書ニ北堂ヨリ三田ニ
鴻ヲ招き午餐ス。
進の晩餐ヲ
ス状ヲ為シ北堂ニ
峰雄ニ状ヲ
ス、関山ヨリ来ル。

ニ頼ム。貴井一ヲ見
ス。石塚ヨリ出
ス。梅原牧一ヲ来ル。
ニ丁ル二時ゟ
流の文ヲ
ス。午ゟ浄念寺
ヲ三冊ヲ
ス。真
来ル。

東京夏之

時、風、表玄関を叩き、それ迄に三階改築を終了、仮上げ致すべき旨お申し入れ注文を施す、山岡

汚心大に満足の意を表し、其時に支払うべき旨を約す、文の出発も七分の納めを終り、午後出勤の命を受け、二時早大の維持員会に臨む、二三重要の議を決す、帰宅の上、後藤新平卿を訪ひ、松岡駐露

時、八木翁一家大体賛一の説を来り、五日市の別荘一切を譲渡し、田中正平氏も一切を譲渡し、山岸俊夫の話に応じ、来七日午前を約す、大隈侯

ざつき詳細後の答礼を受け、四後藤新平氏を訪ひ、とかく面倒を避けるべく、未だ決せず、夫人体ますますよろしく、愈〻避けるべく、未だ決せず、夫人体を二分の一を来る、松本忠治郎来る、一村

時、往村長井森勝馬氏方、大濱長信氏
編纂の「関守計畫」を披露し、協
議す。其の結果、編纂事務を急ぐ代
金十円交付。午後長谷の若宮に集
会を催し且つ同志を勧誘し、三回におよぐ
ま、拙著「蟹の泡」漸く組上る。頁数三百
五十

十二日

晴、今朝高田を動かし、大濱氏の依託
を編纂する件を協議す。先つ材料

蒐集を始むることとし、大谷の維新史料
提出し其の写しを得て後日返却
との大意を定む。午後出版部と協議
の泡の印刷に関する件其他を協議し
また大濱邸と刺り、大濱氏依託材料
蒐集に関する件を得ること、依
書をも郵送。白鷹を訪ふ。今日八一
に帰る。直ちに印刷つく。ポンプを修つ
て除雪液を施す。文明協会より金弐拾五
十円借入、印刷会社に支払ふ。
帰す。郵船会社より(十八日)通帳到る

十三日

晴、校友小久山寿雄君訪問ニ就テ
話ヲ交ヘ、昼時ヲ移シ、辞シテ去ル。
サンドラ会一名ニ付二巻ノ十序
ヲ終ル。午後一名ニ付二巻ノ十序
ヲ終ル。午後ノ作業ハ大根ヲ抜ク事ニ
決シ、之ヲ終リテ又自
ラ之ヲ終ルヲ以テ事ニ、俗ニモ教業研
究会ヲ開キ二三ノ問題ヲ提出シ、各
自研究ノ上次回ニ発表スル事ヲ
約シテ散会ス。

十四日

晴、真鍋信城氏来訪、暫時ニシテ辞
シ去ル。山岡俊夫氏来訪、所望ノ
使用料納付、尚春ヲ又多クノ
口五峯ノ扇ヲ又多クノ扇ヲ交換ス。午後牧
ヲ終ル。一時ヨリ会ヲ開キ、特ニ会ヲ募ル
事ニ決シ一時ヨリ会ヲ開キ、関方中
来訪和ヲ終ル。再ビ山岡氏来訪、所望ノ
ヲ終ル。山本書店ニ回
ル。大坂木崎好爾氏ヨリ大日本重石史
中巻ヲ贈ラル、巻尾ニ跋ヲ付シ、巻ヲ
収ム、夜ニ入リテ帰ル。

十五日

曇、石川苔蘭八ツ半来ル、五拳の印参刀印
笑ヒ去ル、未ダ来ラズ、昨夜柱木屋ニ手向代平
三円(拾銭摺添)去ル一八ニ円三十銭ノ内
印料礼金三拾七銭ヲ払ヒ、残リ金ヲ以テ
ヲ払ヒ、関大ヨリ来状、昨ヲ和多屋平
事ヨリ、苔菜八ツ半来ル、卯ノ宝数刻ヲ以テ、木時頃ヨリ
ニ御出ヲ乞ヒ、成舎編輯陳列ノ招状
到ル、一本ヲ以テ廿日
(巳三紙ヲ云)午後
三紙ヲ到ル、

戌今ノ線ハ物陳列ヲ見ル、龍村平蔵ノ
模織上代裂ヲ見ル、(神田ニ国ヲ
中食ヲ以テ真ヲ乱ル、函服ノ
十日為替使ヲ為替ヲ
ル、

十七日

晴、坂本嘉治馬来ル、五拳昨ヨリ
自書マヽリ四枚ヲ、春山泰治ノ訃
到ル、石川大ヨリ(廿八)ニ謝状(御ヲ
ヲ)

も為す、於茲乎柿を乾
宇佐美出来て托して好き、山津後又よ
り手紙参也、京都大丸出張
員主に仏国美術使来朝、又直接
に駐日使節として文部省より
そこの案内（通訳）真崎氏
終に家石南に集して
門来訪、相すゝめて五拳を喜也

十七日

晴、心未一峯下村和助来訪、暗に関

大らかなる批評、
八幡の舎の話、話を聞
急話四五を筆録
明後納付す、午後出勤
を電す、関西より杉浦重剛先生
も、独善解の泥
影の神学も五拳一夕談
の神学も成り別
仏事（ありの先生を
住職より主出勤
勝別る

（十二月号）

十七日

晴、森脇来訪、村井紀之と約手二通
割引を乞し入る、朝沼十二月号也、出版
部へ到り自著の教科書「」を受取、共益
商社校の方へピアノを納律す、高橋義
彦を晩餐に招き、且山崎と紙を婚
し五峯に勧商会の三子を観楓亭に
招く、四時富士見軒に名家手帖二冊
を購ふ、帰途梨果三ケを買ふ、

十八日

晴、今年九時教会の元日礼拝に列上
二元日礼場等の掃除、今日両軍一帝都を発す
昨今の活動、今日八一も来り、来
のの也大阪勇、午後林田も来訪、来
賜の話を為す、午後林田も来訪、来
月の吉報を聞き歓ぶ、二三の国書を
ふ、五峯も仮寝、山崎
元旦祝詞を上る、今度ハ
大阪勇来二行列る、今度ハ
き雨宮駿氏等、九時就寝、霧

昨、海を来る、京都の谷村一太郎より
電報あり、今夜金星丸にて
帰京せらるゝ由、依て
直ちに迎ひの為め、午後一時
出発す、途中にて
逢ふを得ざりき、
夜に入りて
帰宅す、
谷村氏
帰京

此歌を為る余宅迄
六十有三年安生未為矣乞為導
訣其父柩前通
家族之余而興訣而
八時再び訪つて、房人を
のまゝ帰宅、十時頃
電を受、久須美医師と同し
汽車にて葬儀に参会
物品の後ろ

二十二の
時、今年八十九歳の老

我の墨うつことをうけ、廣井を紀き五拳
死後葬儀のお手傳
の後始末に関し相談
し、此未明未だ
書通の二三を裏
房を訪問す、此時
寺に宿不らしく膀胱炎を
急、又々を覚し
但し傷口も疼痛
ひとも之無く
現を托すると

そそ祝の、病人平安に眠を貪る
早く辞して帰路に就き、帰路本町二通り珊瑚
閣に二三の雑貨を購ひ、二十四日
ろ、

二十四日

晴、村上の伯母伊助二十二の脳溢血にて死去の
報を得、吊電を発す、海を忠亦死去の
生ぬ式の電行く、浦和
二味ろ蔭弊等一徒真鳴に城ろ嘯
き特利来、丹奥平に謝電并に五給
金を郵送、所得税八十五円納付の
ろ、阪上弘義の注射
を施す、今日八一別府分出利ろ、昼
し来る、七沈来三来る吉西代のゆく不同西
十四日老す、午後阪閑を清も雑銀を来
す、散来神田の書店に集古印存和帳
を購ふ、倭井四国松り香奥到る、こう
を例ろ挨拶北巷の仲ま菓子
ろ也

時別府参会ニの後
井忠左衛門を訪ね
午後五時を共に
なる。皇太子殿下の攝政
次で宮の縁より出で
おこ接す、午後四時を過ぎ
第従三時号砲
うこと、本年久須美
廣間に於て直ちに
出来、細書を調めて
す、

二十六日

晴、朽木屋に謝狀
演舞と称もやき金の
す、十時四十分発にて
森脇基木
ましと云者ありし為出来事後、久須美
来馬七支藩、三宮駅後のまち内役
す、石村西なりしも
のもと称す、久須美義
谷井忠左衛門と云狀を投

二十七日
晴、朝食大浪信之助の来訪を
受、校正、校正、昼食
後、仕事の事を打合せ、
来訪、古池書、
婦人公論、校正、
訪ひて来、
会合可也、
片身をとる、
書一幅を頼まる、
朝鮮に帰る文三郎

二十八日
晴、今津八一別府二郎の来訪を受く、
晩、女の学校行く、
校正、
夜、旧情を写す、
今津家に集まる、
今津八一四郎の誕生祝ひ
なり、

二十九日
晴、今津八一別府二郎の来訪を受く、

忠治之須美東區之電話を交替労働の
ご尽力ご礼の為今也、来賜、来場、謝意を表
の為南義二印す事務謝辞の挨拶あり
おを始ろ、冊年度平均出、大九元
名ご投票を交付ろ、上田嘉永次郎他
治印九州の酒蔵ご参加し和
五郎のとろろ、ご酒甲ご舞儀を行いと
ろし高紀念祝も始ろ、関ちろも来
也、午後校正をつとも、四時工業倶生部ご
行く、来年印刷会社ご於五十萬円増資
と内定ご件重ろ株主を会し、あろうろ

其の都合を為さんの、ここ株主二十数
名を会し、会社の状況を報告し
増資のろを協議す、増資ろ法律の手続
上来年二三月頃ご株主総会を開ろ
十萬増資と異議なし決す、但九増資
ご当たり若干の株を切当ある重役職員ご額
ち職工ろ配当ご仕ろもの、ご
おましとの提議をなす、増資ろ法律の手続
ご附托ろことを決し、会ろ五名の委員
を指名し候ろを共ろ会を閉つ、
会後来賓ろ重役と内懇を十時頃

二十九日

晴 大風の為荷物の一部を陸揚げ
を見るとも不村氏を
美東馬来訪、昨日の
る旨報生をもおすする件
揚議す、みつ名義
十四銀行、文的揚
義謝状を
忠左ヱ門方より
出港 本日も船中
ふる、揚場市中
条件等
三十日

晴風、今日の一別府
信陸をも
また来る、海を
時揚義
仕切る、

一日

晴 真路佐城氏も稚黄の父君と
細書到る 五天路城氏も稚父
宅のそもそも利す 又江城一家
重伴ふ来訪 信城氏参る 別府
今津二氏の後ちの大分私花群
のうちを報ず 山田彰陵五峯斎
来る 真路佐城氏又来る 終日客
才本を整理す 真路信城氏を招き晩
来るを待つ 晩日信松田氏

[illegible]と云ふ来る 今日の別
稲田博士坂口社珍ふ前田を流連も
会ハさるを 電報と交渉の為め 松ヶ
和泉家の芸妓 寺田義春一坂の祖霊
も前の新営の養と 柱かくのナメ
五十本 老くるを伴ふ来也 雨
をおかす 垂木覚束なく 熱海柏二子魚を贈
り来る 多ク稲田博士と共に五峯の宅を訪ふ 大隈
邸も日稲士と共に 前田七三会 珍客 陪食 夜会
別荘井戸改造費二百十七円払う

吉江幹治、高橋義彦に出状をもつて
田中稲城帝国図書館長辞任の事
任中の労を慰する出状到る

晴、午後より風雨寒く一天雪を催し来る、
坂口五峯の代りて
ゆふべ二十余家へ謝状を発す、九時過ぎ就寝、
寒三夜の酒を婚礼の事三ヶ条の事
出京を代生の代りて断る、長尾杉

晴、田村今朝吉来訪上弘義事件の
の注射を施す、正午帰る、萩井忠孝

行伯午前十五分目如法終る
ゆふべ六十の賀宴を催す、十時過ぎ散会
俊生郎二日酔にて来
する垂髪会
功労株を創立
数名、今年八十到底
訪問の約束なり

晴、午後より伴山
招待
後

時、別府ゟ金澤八一通（五通到着）
未十七ツ半後三時、岡本様ゟ田中
稲城陽ゟ両通（十一時外出）留守
ニ付ゟ置ク、翌廿五日ゟ松喜ニ泊ル、兄
ゟ書状ニ通（一通ハ金澤ゟ）ノ返事ヲ認ル。

時、角田喜三郎ゟ金澤八一通ヲ来ル。別府
亀の井油屋ゟ来ル、金澤八一通ヲ来ル。

印の画ヲ別府ゟ金澤八一二通の後ヲ
うき到ル、三宮ゟ来ル、祇園
花壇の計到ル、和泉文三郎ゟ来ル、
祇園ゟ弟状ヲ参ル、福木ゟ
本光院ゟ書状ヲ参ル、山田油屋ゟ来ル、
喜三郎ゟ松屋ニ泊ル、真澄社ゟ
喜三郎ゟ松屋ニ泊ル、真澄社ゟ
喜三郎ゟ松屋ニ泊ル、真澄社ゟ
印ニ幅ヲ装ヲ
録ヲ希ス、新潟
盤ヲ装ヲ
ゟ。

[illegal]
[illegal]
[illegal]

七帝國劇場ニ於テ紀念會ヲ擧ケラルル事ニ付、
各自平常ヨリ十二時迄ニ出勤ノ件ヲ立
ツル事、二時ヨリ帝劇會社ノ重役會ニ臨ム筈
會ニ臨ミ新增資ノ件ニ關シ其ノ協議ヲ遂ケ
ノ通リ增資ヲ決議シ株金ノ拂込ヲ爲ス事、
數ヲ、孔版ヲ以テ發送スル事、
別有リ、
吟味ノ上出社ヲ命ズル事、

十七日

晴、出勤會務ヲ執ル、十時ヨリ出張部

二利ノ株主總會ヲ開キ二十萬圓ヲ
增資ノ件ヲ決シ、直ニ四分一拂込
ノ、余ノ株數二萬八十五株（三萬ニ充ツル
全體ノ上ノ二萬株ヲ控除シ、迫ニ他ニ發
ズンヲ始メ、總ベテ舊ノ如クスル事ニ一致ス
因ル）北海ノ金額三千五百六十二圓
五十錢也、本期配當金ニ割此金額
ヲ差引千五百圓也、當與金ヲ千二百
八十五圓七十一錢也、
金井利ニ二百二十二圓
三千八圓二十七錢

金七百円也（うち二百円）仰渕今住二も後
引ク。村井銀行約手二百円
拂渕松平康国ニ渕シ、真澄佐助ヲ
招待ス、兄弟為持参、山定後ヨリ
唐澄産ノ酒ヲ贈リ来ル

八日

晴、今住ヨリ三百円ヲ得ル、英貨三十五渕
国寺ヨリ金六拾円ヲ得ル、第七拾国立
ヲ延ス、此費七十円也、村山出京ス、動

空ヲ曇ル渕ヲ以テ雨降、松久来ル二十日
花押教代拂渕、松久来ル二十日
ヨリ午後早大ノ講義ヲ休ム、帝国）ノ主筆ヨリ
談アリ、増給ニ付キ承諾ス、夫ヨリ
元ヲ訪ヒ、夫ヨリ五番町ニ行キ、教
ヲ訪フ、五番町ニ行キ、教
来ル、真澄住所ヲ来ル、明治
社ヲ退社（廿二日）ノ通知状到ル、松井地
大イニ雷ル

晴ず十二号俗称大型
多少出るやも知れず
住職と二牧を
来訪、人吉津
散薬抜を
告げ代九五円
久須美秀三郎
うる。内務大臣
雨、午別府の今

十一日 月曜

雨雲、直ぐ降出す、坂田
増吉来り、先日の
ことを神田に田つて
も相手の抗立て飽
迄、金を家ひとも
入浴を謝す

十二日

晴、坂田増吉来り、昨日の
礼、坂上弘前まで行く

孫陽注射を受く、十久江会社用事
ありて、三枝氏来り、山崎論を時を
移す、本日健児来訪す、
廣井一来訪、午後京都大丸の下村和三郎
来訪す、大沢庄兵衛氏逝去、枝家後向ふ
喜兄と御通夜をす、
美父より招電ありて、十二日午後出発、須
賀生(佐藤)佐藤より本
帳を預りて帰る、今日より来、珊瑚冠と注
(名古屋代二十四時)

十二日

晴、真路信經と共に来る、正木一郎来り話
高橋義彦、坂本嘉治馬来、地所之
典兼之吉田豊道共出版の件より再応協
議す。因に到る、二時永楽俱楽部を会
場とし、文明協会茶話会時局研究講
演会を開く。中村偏の閲し、演甲
の将来七当り（甲宝郭巻纏）の二時
間に渉る講演を終へ、来会の会員
五名を紀す。夕刻、久須美父子と報
之れ讃所「やよひ」に飲む。加藤子佃る

貴族方面、内藤久寛君同席

十四日

雨、後霽、本日健四郎来り語る時局談して
去る、新聞紙大洋梅花出品一等よ
り十四、午後一時より文明協会幹部
に到り、理事会に臨み、種々のことを協議
す。夕刻より協会宿後藤氏と一同梅園に
至り、八重桜を愛ぐ歓をかぎり、之を程
持し、二尺許の流れを観る。鯉魚を賞る
。又宿田とともに池に放つ。田村と共に門司

御茶を呑ふ、午後二三の法帖の手紙を
揃ひ供こす事ゟ
ゟと相成ゟ
ひ終ゟ某家ゟ晩食を終ふ帰宅
住すゟも法要無ゟ湯ゟる合電
觀利ゟ真ゟ源住埜ゟゟ

十七日

曇、風、十時ゟ坂ゟ
大ゟ田後地ゟ
ゟ原拿ゟ

ゟ相成ゟ
ゟき来る、午後
珊瑚ゟ
の図ゟ
ゟて田中稲城帝国図ゟ
其の実ゟ
子ゟ若船ゟ
図ゟ

十三日

晴、大宇高野ゟ

きる天満青物市場に勤務し、海を来
往を楽しみとしてゐますが、出版部の
営業課に転じ、雑誌の編輯に従事
大阪朝日新聞社に入社、学芸部に
病床にある侯爵夫婦に面し、十分許
話を交わす。侯爵は、(すこぶる)気
八面玲瓏たる人物で、陸
宮にある神人叫ぶ声秋風蕭々として
ゐる琳琅閣を囲む
も池もそのまゝ

時、金沢市の日刊
の美味を喫
男子平沢を
森脇重木
松本清張
との間に締結
未決囚
日活印刷
ふ右手一時の
部と協議
の末

八一ふし二通の往復書状を写す、根本氏来る

二十日

晴、海を未多治梅田義一氏より書状を受く、山田佐兵衛氏来る、佐伯より飛脚を以て書状を送る、夕方より行きて修文館に入る、金五円を井上寅次郎氏に託し石巻行の飛脚を頼む、十一時頃に就寝す

二十一日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十一日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十二日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十三日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十四日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十五日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十六日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十七日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十八日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

二十九日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

三十日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

三十一日

晴、紙数書損寺四十銭浄念寺修繕費の内へ金一円を納む、午後より天金二銭を以て書籍を購ふ、五時半比帰宅す

能本私日本学人漢文の綜合的
三通刊る。拙市尾氏
仕事をうすす、風義
入り協定文の去来
事項に付去時間
も四通の作をまとめ刊る

二十二の

時、歳約文の協定
限会長の西前を
状を投す、諸新北
事務、直ち協定

西村真次氏を始め、四谷税務署の
皆様より、代人をもって
の任書並に地方税
決算を終く、第四
深切御考慮、早稲田中等学校
年分営業所得金三千円納付方、石塚三郎
も御年の如く御
味噌漬を好まず
出荷に参ら大阪の小林殿宛にも
三娘之入浦和も
ます

井上馨侯

時、西原雅古池春
備代六十円也
三郎と御名を
く病状あしく
の事、一月と
る上杉御代
等ども等の
賀書、追
元に岡山を
十九年神

を施すこと、お出やの
差不可、但のことく行
板上北兵衛今月八日
まんえ病死
二十二日
時、長三郎殿、金三百四五両、千五百
約手切証書と
百文的御金請取、板上北兵衛
却、高井一郎次
ゐる疾病この
治療録と署名
なるもの此年十一月
吟く刻り本十冊綴
ゑ越署を改め別
用のつを録先数
ゐり山田病院
田作病室
財を要而
勧る、早稲の
又、寄附も
峯をも
金生院
なるもの此年十一月
吟く刻り本一冊綴
ゑ越署を改め別一冊
用のつを録先数、前
ゐり山田病院
田作病室
財を要而
勧る、早稲の
又、寄附も
峯をも
金生院

約也、午等に未収入あるも、
借入を為すもの、元新歳施行せる
時の貸金に元ん
利息を取るを
り梨果を売るを
免の職権を
元亦もござりを
ふ、六終始啖呼
国しむ、

二十七日

廣井一年振坂の五峯より来書、雲井

其ものも換りを
頼む出張処産
ふを時のごとくす、
一東京より出版
漸く軒く重一睡を得ず、
四谷行の頼け入る

二十八日

時ちかまち会社
時浄念寺もの
錦井にくらべ

二十九日

吳康平、初狀をも
まう直ちに行く、大濃郡も
こ遊ぶ、井に三百餘名
城しも吹り次第漸やく止まりぬと
屠毒く多數を殺し、或は三四の後より終
爲をも免れべきし、換校
田陸士九物こ行きこ
なといふ、武市時
いつぞやつさきの大志の場合
幹部を今一番
爲さんことするつ

後再び行く、本多靜六、又其の死
に平狀をも爲す、内務
賜らる、鳴呼江都
らも加之井城
も亦こ件こ

廿九日

朝未だ明けず報知
り文代の事
り電話來る、女狀
限矣こ爲狀を

困しむ

三十〇

時く大便邪魔を訴ふ仮令四日若しくは十一時以
血便ありても容易ならず軽症なりと雖も容易ならず
と雖も、相当なる投薬（毒流通）ありて、なおの出血あるとき
いえども、稀なる例外を除く外、出血
のとまる場合多し、即ち痔核、肛門裂傷等を伴ふ
格別と雖も、之を伴ふとも、私は稲
田に尋ねる結果を信ずるの話をす

けば出血を停止する迄の排泄するそ
れとも多少疑なんとする癌腫の全
く無きの判断しがたきの場合は結腸鏡を施すを
可とすることあり但し此の出血
は或を裏切るの
出血の意味和らぐものとのみ
金）と理を繋ぐ連絡を得、毎の前
診する如く、十一時一先
診を仰ぐ、三時頃来診す、自書の経過を
診る、来診事務所にて二時頃先を休むを
診の如く診を終ふ

大正十年

本年の旅行の終に臨み
ますとともにあたり今昔の感と三信
多多ます紙数を費しとなの困る、あるの
旅行を記すべく其の記
こと更始に別府に於き山陰地方に漫遊しよう
山陰地方へ参りそうろうも行くことも不
此旅行につき感
三回目なり格別の興を覚えとう別府へ
此紀行那馬活を脱稿し得とう、
茶に女子を同伴し汽車日をも九州

来三海塩の見当をもって為さしめとなる
比施行の効果と有志者の
今之接伝来と関係の事業一を早大出版
部一を日清印刷会社にて幸運にも成績
大いなる事を、増資をうけ更に発展を策す
今之ものなるべし、出願都合
十箇月の今般二十箇月を増資
上半季の利益金をもって払増資と
為し四分の一の払込をうることを得ること
日清印刷会社を不半季に成功せる
従り二割二分の配当を為すを得、且つ

来年二回の払込をなし全部払込済
一となるの年一度の信頼増資を
為すの考えなり本年一般に不景気の
を叫び社会社債権者を来す折柄増
資を得るは異数なるものを得、
本年数月前後の前途有望なる
の御金紙幣中額件
其の建碑を
り今なお男爵の
国縁上にも
当面に

文を投ぜんことを
為す戊辰以来、此
君子の志を投文
して新体の文を試
自ら大いに喜し
り来春を除幕の
本年同人の勧
二種を出版
心未行を修め
く一種の文出版
の泡一これ
文を投ぜんことを
為す戊辰以来、此のことの由来
君子の志を投文
して新体の文を試みるもの
自ら大いに喜し、日本刻字改
り来春を除幕の式を行
本年同人の勧むる所に
二種を出版するまでに
心未行を修めく刷所に托しての漸や
く一種の文出版をみるに
の泡一これ乃ち盤
文を投ぜんことを為す戊辰以来、此のことの由来
君子の志を投文
して新体の文を試みるもの
自ら大いに喜し、日本刻字改
り来春を除幕の式を行
本年同人の勧むる所に
二種を出版するまでに
心未行を修めく刷所に托しての漸や
く一種の文出版をみるに
の泡一これ乃ち盤

の遊説を輸
墨亀の遊説を
ばハ印刷出来
ならんと先
筆亀一夕話
つゞし

本年心学一
友の病亀を
文矢も
こゝに、友の病亀
あう坂口五峰

の遊説を輸
墨亀の遊説を
ばハ印刷出来
ならんと先
筆亀一夕話
つゞし

本年心学一
友の病亀を
文矢も
こゝに、友の病亀
あう坂口五峰

願しとなるに至りしも尤も心労の大なるもの
稍回復の重患と雖、夏時涼来一進一退
退の病況なるも此の危険の間
然るに本年所得税法の改正実施に至未だ無き
其筋を煩すこと、なる弥て
扨置し臨時費も典つて家計上未曾
有の大支出を見て殆ど
の大出を見て殆ど
幸に本年関係事業成績可
なるの如く但し幸に為めの収支
なるの旅に為めの収支
お償あるに尚ほ剰餘を生じ

営業に実行の
おくる也
本年の旅行を
有する能はず北水三回忌の
用意を法要を営むに
一日も早く
跡に回向と集
至欲三千円
種と雖も
優る来あるの
先くそる馬
営業を重ねるも得ざ

大正十一年壬戌

一月元旦

今朝降雪積ること尺余、恒例の屠蘇を飲み餘を餅として後、大隈邸に到る、侯爵体平穏にして、毎年の如く首途行を例とせまると雖も、旅行を見合す、午後矢吹、五百城両氏来る、近藤氏も来る、午後晩餐相果て退散す

大正十一年十二月末日

手録

時、振売うろさく、相談を繰しちり、
名を指しもお出、電車
へ行く、電車の海
九迄、永代橋より次往
めきやうさ二箱の味あり、終点まで
しも乗、両国、各橋を取さ
田八ち一泉こ、終
海を地盤取売こと
家昔こ個奥を
紹介ま、ましも光る

具を婚礼祝ニ御
箱玩具を
玩具ニ跡を婚
乙三古岡（四時
宅、前田宅ニて電
岡海士膳石屋ニ
き竹前田経診
報す、左甚湾阿里山和
五投到来、
態ニ付来
ち件を御

時、と経仮の立峯と
と掛ひろ法元寺のめし、去つて大隈邸に列る
伏の病気、表化ちみ
まを治らし心臓麻痺を
ありと云ふ仏事式と
う海軍論を
お約束に行きお家を
し、今その二教路を、三時、式めを

病気を願しても也、十時頃も大概昨日行く候
の答慈漸次衰弱気の集も減退但し食慾
稍回復の徴候を診断するを得数日経過後
漸も其病もなく終焉を告げるべしとの
臨定書沼橋田坂本三名一緒来宅一重三合
一礼葬を依頼せり後作業の式次第
後作業の式次第
銀の如きもの紙に候の容態をなす
表そのもの、岡葬
八冬分の紙そのプのハガンダを行わし
もの、一面そのもの、一面そのもの
元気事お祝をいれ

の依手をみてお祝をいれ、花しき成そん
八岡民葬の形式をみて告お式を
行わす、式場をの比表とそのもの、五番目
き葬用を納をそのもの内三番目次
清室そのもの、落名の物も表候
の病状上少しをしてお祝をいれ
そしてソップを召候をお祝
盛頭をそのもの二七を経下そのもの報告
り

五〇

時、今朝十時四谷伊賀町今村氏に到り土佐に
帰る全職工に謝し幷に其の訓示御遺
言を告げりて職工一同と倶に嗚咽し止まず一
家の全部は祝福を受け十二時過ぎ大隈伯
に至る、侯の容体殆ど不良、時代状態に
陥り最早之を自覚し得ず、秋乃七日
くと云ふ、其に再度の脈搏をあきら葬
儀に関して其の部署を定め、余推されて総
務となる、明日葬儀を為すべき二十数
名を召集することの手配を定む、又翌

新聞記者急報を齎らし病状の危篤を報
告す、但し侯の病状未だ危険を絶たず
されど一ヶ月の間は今を持続の安全也
と云ふことなりき、余今日再び之に赴任
するにつき、余は自動車を以て七時半帰宅
す、時恰も御令侯の御前に帰着し紀念の
自動車あり、記者四名余と同乗を勧めて
近く送り行き、車中余と侯の病床を
説き、臨終の事を語す、彼等侯の傷患
を聞きて余を同乗せしめたりとの歎い
く、老侯に勧し最後の奉仕として葬

儀を全力を挙げ、以て
を表します。

一、

昭和九年十月六日午前十時より
葬儀執行候に付ては
お忙しく終日一日五万名
を数ふるに到る
一日午後一時迄(通夜を)
一日午後の記帳者二十数万
にて余も未だ
葬儀の為めの
を行ふの
を挙げて
負を葬儀委員と唱へ、

五月の
の委員を挙げ
葬儀の方法を
う鈴木家の
て主として
塩津の三人名
を感ぜしめ
を一斉に掲げ
も快諾を表す、
葬出来難き
すことである

廿五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

廿六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

廿七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

廿八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

廿九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

三十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

四月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

五月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

六月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

七月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

八月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

九月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十一月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十二日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十三日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十四日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十五日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十六日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十七日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十八日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月二十九日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月三十日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

十二月三十一日 晴 午前十時 会津若松着 午後一時 若松発 八時 帰宅

すべきの儀仰付一日比ゟ式場の設并
大喪を国し来る二日仕中御発輿
仕まつること、なる、但し御名代
御供受持る都合也八時頃ゟ公家を
供頭ゟ之あるニ付ニ日ゟ数名、就而
当日中稽古ゟリノ上芳堤秀
夫の儀をつとめる

八日

晴、今朝八ツ時ゟ仕三日)刊る、昨ん

事ヲ以テ公ニ列ス、現像ヲ施シ画
刻彫刻ヲ為シ書図ヲ写シ三時大隈卿ノ家
ヲ引ツ提キ義ニ依リ国ヲ興シ都営ヲ定メ其他北
海ノ事ヲ為ス、先候帆ケツタイ、
然ノ志ヲ施スヲ以テ事茲ニ
至ル葡萄酒ヲ頂戴スルニ至ル、大隈
初リ刀平田ノ事ニ関シ未書、和ノ如ク
物申ス、石塚三申出ノ事ニ付
野菜書ヲ以テ先候ノ履歴ヲ編

来る朝ここに共に久米邦武の論を聴しめ
つき勿論を聴しめ人を其の不在地に於て
いまそれ日比谷斗地の談判
当一二俊成する不都合大体決定す
夜雪あるも、侯の
却あるも野を
涙八一方ならず
きり左右、寝後
また侯の
て利り新聞
町田忠治あり先

顔を拝し
また、家族
てすまぬ
徽庭の
ることやすくも
とをふるを
為武市町田
宅に参
の俊正をかくて
二時をもく
く絶息仕
く
顔を拝し、
また、家族
てすまぬ
徽庭の
ることやすくも
とをふるを
為武市町田
宅に参
の俊正をかくて
二時をもく
く絶息仕
く

拾銭、葬儀の大要、殊に四民の葬儀に
は一坂の流涙を強し終に四家の供三四
葬を以て過ぎるの冷淡ならを繋ぐ
つて三四の委員と専心告別葬祭の
式前の件々に付深更に協議十二時帰
町田忠治氏為めに報到る降伏の電文の
中山大使一通も電報到る降伏の電文の
写し到す、葬儀委員二百名に通知を発
す

十四日

晴、早朝大隈邸より到す葬儀に付終

日多忙を極む、儀伏を附するの勅令
又々発布勅使大隈邸に来る、中山大使一行
より葬儀に関する謝電来る、三万人
の葬儀委員の名簿を作る、四日比谷の
附す、日比谷の告別式場を監督する
急設掛十数名を差す、午後一時より
也、小川為次郎氏より入棺
余等数名棺に入棺
見る、入棺後各棺に釘を打
終つて又事務を
外に大きく之んを張

…陽堂の時刻となる雷あると余
先ず着席（…貨車を応用ことの
…撤を主て電…自動…掛廻すを釈終…
…室に到る十一時半家に…
本日特命全権次官の…侯の葬…
…る六百字許の長文を上生…侯
の神霊と…鏡前に侯の…
生歿年月を余…
今日…、…立法…ら掛…の
…列る時、余…
…るのもの也

十二日
晴 早朝大…
動貨車の設…
社と掛廻し、…
…私をもも…西午…
大なる大…
今日つゝく…
…次て余…
七ヶ戎…に関…
前…の…に…
…兼に人名、…

東京図書

す、毒多市侯の
を幸と、侯の高
告を待ひ二時半
三十分頃
大隈邸
き市倒
自動車
生園と
後行自
き逃し
る所を
向ふを徒歩の兄
断し、柩を載せ
するものを待ち
速力を以て早く
決定、又儀仗兵
の式場
大体の順序
り伝統
静かな式
淑やかと
後の安

番号のお式帝
係長の多の文地
大銀行の異
協定し漸や時
得ざる、その為
ます、

十三日

晴、大春敏氏葬儀に
午大阪倶楽部に
銘の抽選を
鴨を贈らる、下村山
文書発著集
十時大阪部に
治四中学種
儀し為る
めのその時
後駿後
午も六約
雲参う
列ます、

列し午十時より堀
鴨を贈らる、下村山
文書発著集
十時大阪部に
治四中学種
儀し為る
めのその時
後駿後
午も六約
雲参う
列ます、

車と同乗の上参会に列する式場の（ママ）
ならず、途次各九官等休憩（観摸者）
城ならびに前の通路ぬかるみの為自動車
（観覧）ため小ども雪のうえを歩行
あり、花のうえを
ことを希しく、えんりょ
接拶要旨のごときつぺきの場所を定め大
隈伯、徳川枢密顧問、自動車を捨
満一枢密顧問の塗料ありの改正
所あり、午後勅使到着詔書奉読

時、今朝二時起床洋装を四時大濱邸
に到り、婦人とともに御供まで自
動車、暁天をつゝみ、霊前を拝
祭畢如斯式に列す、御遺骨の儀式
東京谷宮殿下
式部職官の誤
免時勿論秘
文を読むことの
柏手原則の
しめやか、時刻を
出来るを仕合
今朝を感動も

をもつて拝を宣読前に出し拝事に載す
ることを得ず九時三十分拝跡つを出び
騎兵警護し三十数台の自動車隊
後より全部の到着を待つ、通路両側民衆
埼を為す、早大学生の整列校つ
前を九時下車、霊柩九時
着するや、御棺列の前頭棺後に
従つて日比谷に到着、(途中御の御降
下日比谷に移す時勿論)す、十時
より先つ入棺し五分の葬儀式あり
ついで入棺を終り(途中拝を)へ

施主時宗、檀を式場に飾し一切の
を参詣して為十二時より
とする処の仏前の供物
と華旗を以て装飾され先導堂を
ち、公衆を入る前、その二番の
檀前に集まりて拝し、十九番の
鼓を乱るく、十二時をもつて開を
を入る、洪水の如くに大衆入り来る
式場もこゝに埋めつくし人の海のごとし
全き自由をもつて大衆散列
混雑を惹起しやめよ鎮まるの刻に
霊柩を墓地に送り済ることゝなる
の一つうしに式を集の公衆を流れに散
言をおし一人うも帰るものなく
勢を易するものなく静かに式を見守
散する能わざるも混雑なくも
ち混雑なくも一人参拝の群衆の式場を目
技をしこうして式場の白布小屋根の
色を変し棧の上を歩するを得ざる故
りとう民衆至誠の表現と見るべき歟
日八時より約三十分間式場の三時門を閉ず

霊柩を推車に移し従来を護西寺に到る、
別してあることなのみし、霊柩を
のみ寺に寺域を造し石碑を無縁
き上げ寺に墓域を選び当寺歴代の墳
穴に収め入れ墓標を附するまで約四
時間を要す、境内の冬木と帳舎を以て
葬儀会場を設け各集十時葬
新緑する雲(林兄、次兄)の代拝あり
引続き一時より、北日何某
の弔詞あり北大葬弥
今新たに試みとして
るようにとの
る余の先輩とする
るとの
飯り吟血守倒
北の葬儀に心血を
しを当時の
を持つ
おに大
飯田
を去る

宣言を得て、実に国葬を行
ふの挙を以て国民舞を
の上なる群臣内閣する生
て亦し得ざるの
次の大位を践祚
なる我の国民の勢力と
余の力にあらずと
最後の奉仕をして
まで此の大位を
原因なり

誓て松平康国侯を
葬儀委員長に
潜に執拗哭泰
業無限聖徳
独り公
此の会葬者
葬、其法皆国民
の為めに
此の会葬者
葬、其法皆国民

十一月

公爵毛利元徳
葬儀委員長に
勲を、坂上弘義を

を受て、午後の後大潟神に於り営の事
実を含め、参考の為、議程に関すること
とを提議したの件をるす

一、親戚並に負十数名を招くるす

一、謝礼書を指名して謝状を
作りを嘱託し又事をもる

一、礼状四種を印刷す
四ツの

一、謝礼の為廣告を九月号に掲載
する件

一、新令者用礼帳行事代理をも

塩俣振興会にて

一、支部役員会にて団体人名を報告する件
現四名以上一名

一、供養祭の件

一、墓不参者に対し命名墓守
二名を以て人に充する

一、弔状弔電に関する件

一、葬儀に関する件 死者壱名十数名を
指名こと

一、今年度整理する件

有地伴と別し宮ノ下を宿
湯本、箱根を過ぎ一刻を
費やす。

十九日

晴、此の日の降雨
夜初更に至り稍
をうるをえず。お牡二三の
手の図をなし
今大阪の和尚
夫自動車と旧
四時お塔ノ
ノ湯本等と
渡し大阪家の
君、井一の
建部邸
七来る、
す也。

二十日

晴、朝早ク
義後を
みを
墓

今朝を漸く記す、和気清麻呂平より
修学院(道)離宮を経て北白川(道)離宮を経て午後
神田を巡覧す、田植を終りて天金と称するもの
到る、今深夜迄降雨も亦
佛国公使館員一行入京、朱村来る、大隈侯の主賓を
招待せしめるものを謝し一也を書
七月廿日

二十一日

晴、婦女界記者来る大隈侯夫人より新

その報知をもとめ乃ち三十余日福沢
諭吉翁をしのぶの会(道)を催すの文
を投ず(住吉)、杉山森助来田村を招き侯の意
を報ず、往村出版部の件を談ず
後出版部に到る、清書を命ず
午後雨大の後依然炎暑、
六時橋本を出で高田馬場に
成を約し去つて麻布飯倉に徳川侯を
訪ふ、和田を経て渋谷氷川(道)に
至るの間雨後の月影

来る議会の諮問と為す、問題を定むる事
文部省より帝国図書館に其後任を定む
ものなるが其要なるを無視しあるにつ
き、文部省に向後の注意を促すことゝする
事なり、結局徳川総裁文部省と談合と決
す、晩餐の後帰途に就く十時帰宅、寒
気帰途に備すき高橋源氏ときに地名録
典中山席とも契約を済まし到達

廿二日

晴、到寒、修繕の研究所凍結、日清生屋

保険より修入金利子二万円、所得税其他
万五円四十三枚電信料十八円五十銭
納付し為め交付、十時堀之と
共に高田を訪ねて談合で総長須平大養
後に関する重要の内議を凝し二時半に
到る内閣の決定左の如し
一 高田総長と協議き大隈侯爵
高田の三人を名誉顧問とし総長
に代りて皆署名とするにおいては三人の
内一人を総長とするなく
都合よく総長とするなり也

一 総長の外に人心集中の機を利し
閣校の統合を図る為め名誉に進
推挙を以て学苑の中庸に至るべき其の生
全部を合併すること其の時は二
月十日とし総長の外高田坪内両
氏顧問と為すこと
一 大隈総長紀念事業として大講
堂を建つることを計画し資金を
募集すること
一 本年は学苑創立四十年に当るを以て
右紀念会の際発表する学苑内
容充實の方法を定むること左の
委員を以てす 大隈 高田 坪内
市島
一 既に決定せる学苑の大建築（高等
学院 図書館 事務所 其他）を竣
成せしむるため相当の委員を
置き資金を共に募集する件
以上の内第一項を除くの外は総て来る
日の維持員会に附し決定すること
尚大隈侯銅像建設の件を提出し
学苑関係者に諮問する各方面し

団体参加し、海岸に着手ここの
こんをつの我し
校のえを参集とせず催
て決定を要あす、此の件の具体案
八条ともに提出しる
高田を経し物統本日前日の出発を
訪ね国会を延期、来る通常
五年を村立の飲料一面を処分、金
三万円也 記りこと
引出す

二十三日

時、社会党は内閣総辞職の通告の出ずる、九時半大
隈家に到り仕事始めに参し、文部省のの
意見を相伺ふ、それこれと総辞職後
直ちに十時政務審議会を開き、午後の前
を終り、十二時より閣議、十三の書類
を持ち回り、出を決し、午後三時より閣議
こと、午後も引き続き閣議、午後六時過ぎに帰宅
四方に祝詞を認む、九時過ぎに帰宅
のとうそを終地
早稲田郵便局より大生股印を預かる

とするの交渉を受く、昨日大隈邸に於け
る幹務委員会の提案要項を参集し又
大隈家條紀刊行会の規約を立案す

二十四日

晴、渋沢子爵出頭にて出頭を約し
評議を始む、十時より大隈邸に列し議
決事項(三十件)を後来(委員会)中略
礼典部内交渉部(増田掛・塩沢掛)残務委員
会を召(とき)午後二時(とき)会を召し左
の散件を経由(任)常務に加わ

り決定

一 霊柩車を学校に於て保管し
しないことにつき処理し
件

一 弔問者の諸物を奉受すべき人名
記簿への件

一 外人へ謝意を表する形式に
件

一 葬儀録を編纂し大隈家
に保管して永く後世に伝ふる

一 賽銭を元資として葬前に華

表を作る
一 紀念アルバムを印刷すること（仮）
三十四冊
一 香典及び弔電の意味をもつて
第四回五回生一人につき五円
八百年記念事業に関する第四回五回生一人につき
高等女学校生徒
を寄附すること
一 葬儀に関する第四回五回生一人につき
同窓名刺 小紀念として卒業生一人に保
存すること

一 全国の会員（仮）埋葬予定人住所
調査を委嘱すること
一 五十音順に記載の上幹部を初
めとし一般会員を網羅すること
毎号を発行すること
六人位の編集委員を置くこと
一 残務整理委員若干名を置くこと
編集を大阪家政専門学校に
委託すること
右決定後会長より三時帰宅後
件を大阪朝日新聞社に

の養育に尽くされる群衆書夜絶ゆる事なく
三千乃至五千人を算するに至れり大濱神社を建つるの動もすれば紙幣の投与を乞ふの説例ふべしとの
す、こゝを以て大濱家之れと同表
すゝめ、残務整理等の為
況をすゝめ、其の後侯の生誕の
をトして葬儀の事務を
の十数の事業を俗
侯其事業を偲ぶべしと提唱し之れ
々円余を表しようと

二十五日

晴、午前五時半起床、冷水摩擦、四時半朝食、
次で手紙、本邸に至り、
衛を伴ひ帰る大濱侯の当家に
ありて、午後出発、
り二三の事務を
午後本邸に
来り、後事を托して
る

二十六日

晩、市長主催の晩餐会に招待せらる、出席者二百の余、大県侯爵令嬢も列す、土佐藩総出にて盛会を極む、十一時過ぎ散会、帰途、一二の同志を誘ひ、主旨を述べ、浅見氏宅に立寄る、十一時半頃帰宿、就寝、

二十七日

晴、昨夜上記の事を注記す、例の如し、来訪

[illegible]の統率の下に大隈侯爵の邸宅を包囲し、今度の一大事件[illegible]き、午前十一時出勤、部下を励まし統率の下に大隈侯爵を包囲し、二時之を終る、今[illegible]維新の気を吐く、二三の要人を決す[illegible]拳して大隈侯爵を投擲す、直ちに[illegible]負傷せしめ、大事を[illegible]帝都を震撼せしむること[illegible]早稲田出張所を[illegible]仕也、諸義挙を列[illegible]

大根先造
出願を合
二事柄
り
を徳川
勢
三百円
ム
三十

今也、
をもすゝめ
之地租二件十九
一冊
吟
多
扶
也

二人の者を候補者
人のみし、内一人ヒステリーの病気なりおる
さまる見込なし、大隈家の為めと真実
べきこと、漸やく退却、印西三校と到
の指揮を執りしが又代議士と称す終と代
事なり家計上の為め郵書を以印
つきこれの指も名みなり、高田と出
時郡と立合の内場そこる、海田係士
もこ重統そうウド添士黄骨もあ
、高もし来る件こつきこれの後あり、
又刺客の伝も聞話に有来、山之書翰

もし新宮上人の下山状(後下状名)
書を兼ご附届もまた贈来ら

二月以降別冊

以下全て

白　　紙